

飛身長目

森信三先生参究誌

通巻155号 平成28年10月1日発行

「修身教授録」探求（第百十九回）

仕事の処理

森信三

■二月という月

今日はもう二月です。ね諸君は二月という月がひと月あると思っっているかもしれませんが、もしそうとしたその人は、まだ本当に人生と真正面から取り組んでいる人とは言えないでしょう。そもそも人生の道は上るか下るか、進むか退くかのそのいずれかです。したがって少しでも油断をすれば引き下がるほかに無いものであります。すなわち進まず上らなかつたとしたならば、必ず退き下りつつあるものと覚悟しなければなりません。

そこで今二月をひと月あると考えているのは、この意味から申せば、すでに人生の道を下りつつある人と言わなければなりません。では真剣に人生と取り組んでいる人には、一体二月はどう考えられるかと申しますと、まず半月プラス三日ぐらいにししか考えられないでしょう。もちろんこれは数学の話ではありません。そうではなくて、この二月という特殊な月を最も後悔しないように、予定を狂わせないように過ごす心構えから眺めた長さを申すのであります。ですからこの二月が半月プラス三日であるということは、おそらく諸君がその公生涯のすべてを通じて間違いない真理と言っただけでしょう。あるいは諸君のうちには私の死んだあとでも、このこ

とだけは覚えている人が一人ぐらいはあるかもしれませんが。何となればこれは今も申すように現実に根ざした一真理だからであります。

■即今着手

そもそもこの三月期という学期は、一学期や二学期と同じつもりでいたらそれこそ大変なことになります。まず賞味は二学期の半分と申したいところですが、実際は三分の一しかないと言っただけでしょう。そこで今一、二学期を中距離走だとすれば、三学期はまさに50メートルの短距離と思っただけからいといけません。もちろんこれも数学的な計算ではなくて、全く我々の心構えの問題であります。ですからこの三学期という学期は少しも脇見をしているような暇はなく、全く息をもたつかずに突っ走らねばならぬ学期であります。そこで諸君もこの学期にはあまり課外の仕事物など見ないで、全力を挙げて学校の仕事に傾注して、その処理において萬遺漏なきを期せねばなりません。現に一、二学期にあれば諸君にお勧めした課外の読書も今学期に入ってからただの一言も言わないでしょう。これはどうしてでしょうか。この学期は下手に課外の本など読んでいますと、仕事の処理が遅れて大変な結果になるからであります。三学期も一月の間はまだ多少のゆとりがないでもありませんが、ひとたび二月とい

う声を聞いた以上、もう一切脇見はできないのであります。そもそも建国記念日が済んだらもう二月も半ばを越したと思わなければいけません。それから三月の試験までは真に息つく暇もないのです。このように三学期は学年最後の締めくくりをする学期でありますから、そこで中心はどこまでも仕事の処理ということに置かねばなりません。そこで以下この仕事の処理法のこつともいふべきものについて多少気付く事でもお話ししてみましよう。

平成28年10月1日発行
号の尖端であり、また実にその焦点をなすものと申してよいでしょう。したがって諸君のこの学期における自己鍛錬の眼目は、一つは徹底的に寒さに打ち克つことであり、もう一つはこの仕事の処理ということに置くが良いと思います。さてこの仕事の処理法であります。私が、私はその秘訣としては「着手を伸ばさないうい」と言う一点にあると信ずるものであります。多くの人は常に「仕事のびのびになつていて……」といいますが、その実それは着手がのびのびになつてゐるといふことであります。元来仕事というものは、着手さえすれば特殊な場合を除いては、まず途中で止むことなく出来上がるものであります。そこで今具体的に申せば、課題などというものは出されたその日に着手するのが一番の秘訣というものでしょう。ところが大抵の人はここまで

は突き詰めて考えないものですから、ついのびのびになつてしまふのです。その課題というものは、出されたその日に着手すべきもので、一日のばせば一本取られ、二日遅らせれば二本取られるというものです。剣道では続けて二本も三本もとられては問題になりませんが、それが課題となると大抵の人が平気でいます。実は課題の方がより深刻であるのに、多くの人がそうと気づかない。この根本の自覚の足りないところに仕事の処理の抄らぬ根本原因があるわけであります。

■一気呵成

次に大切な事は、仕事というものはいったん着手した以上、できるだけ一気に仕上げなくてはいけないということです。これを怠つて中休みをしますと、どうしても興味が薄れ、興味の薄れる事はやがてまたその推進力が弱まることとなつて、勢仕上げが加速度的に遅れる結果となるのであります。そこで現在の諸君としては、小さな仕事であればその日に仕上げてください。また普通の仕事でも、まず二三日で仕上げるという心がけが大事でしょう。そうして余程の大仕事でも、まず五日ぐらいで仕上げ、一週間以上には絶対に延ばさないようにしないとけません。ことに間に土曜日などが挟まったならば、必ずそこで食い止めて仕上げるという心構えが大切です。

さて一気に仕上げるにあたつても、またそこに多少のこつとか工夫というものが要りましよう。そもそも仕事というものは、七割五分あたりまで進むと相当の人でも疲れが出て、ちよつと嫌気がさすものであります。もしそれ以前に嫌気が起こるようなら、それはその人の素質の劣っている何よりの証拠と言つて良いでしょう。同時に一通りの人でも、一気に七割五分あたりまで進むと、さすがに少しは疲れが出るものであります。私の思うに人間の分かれ目はこの時に対する態度いかにあると申してよいでしょう。夜も相当更けたし、まただいたい疲れても来たし、もうあと僅かなんだから明日に延ばしたつて出来上がることだからと思つて、明日に延ばすか、それともそこからさらに勇気を奮い起こして、これからこそまさに自分の勝敗優劣を決する肉弾戦である」と思つて、ねばりに粘り抜いて、とうとう一気に仕上げてしまふか、ここに私は人生の分かれ目があると思うのであります。そもそも仕事の処理等と言うものは、一日延ばすと一日遅れるだけで済むかというに、決してそうとは限らないものであります。いや一日延ばしたが最後、意外な突発事項等がおきまして、多くは二時遅れるだけでは済まない結果となるものであります。つまり仕事の処理というものがいったん伸ばしたが最後順遅れに遅れていよいよ手をつけるのが億劫になりがちなものであります。そこで仕事

発行日 1928年10月1日
号 555号
巻 1巻
通 1巻
くもちょうひじちようもく）
飛耳長目（ひじちようもく）
を処理する秘訣は最初にも申したように、何よりもまずその日その場に着手するということ。第二にはいったん着手した仕事は必ず一気呵成に仕上げる。第三に、しかしいかに一気呵成に思っても、七割五分あたりまで来るとどうしても一応嫌気がさしてくるものだから、そこでへばらず最後の二割五分位のところを決死の肉弾戦と違って、一気に突破して仕上げる。大体この三つが私の考える仕事処理上のコツとか秘訣とか言うべきものかと思えます。そこで諸君は他日奉職したならば、急ぎのハガキなど15分の放課後の時間に書き上げて投函するぐらいでないといけません。ところがこれも一時間遅らせますと次の放課後の時間は他の用事ができたりして、結局一時間の遅れだけでは済まなくなりがちなものがあります。一時間の遅れがやがて午後となり、うっかりすると一日二日の遅れとなることさえ少なくないのであります。

■凝滞を避ける

このように我々人間は、起きている間は全緊張を以て仕事の処理を敢行して、そこにいささかの凝滞をおこさないということが大切であります。諸君の極楽とは別にないのです。出された課題をその日のうちに着手して、二三日か、せいぜい三、四日の間に一気に仕上げ、後は提出日まで悠々としている。その期間こそ諸君にとっての本当の極楽というも

のです。これに反して提出締切日になってもまだできていないという時、そこに諸君の地獄が始まるわけでありませう。（一同哄笑）かくして人間は起きている間は全緊張を以て、わがなすべき仕事の系列を次々と処理して、凝滞もない時、夜ともなれば自ずと安らかなる眠りにつけるものであります。しかもこれはひとり一日のこのみではありません。人間の一生また実にかくのごとくであります。思うに人間その生きている間を真に充実して生き抜いたならば、けだし思い残すことなく大往生ができるのでありませう。今更改めて申すまでもなく、人間の力には限りがあります。そこで実にわがなすべきことを成し終えたならば、何人も「我が事畢われり」として安じて瞑することができると思います。とにかく私どもは人生そのものは繰り返せないものでありますから、一日々の生活の裡に何らかの趣において、自分の一生というものを悟る工夫をしなければなりません。このように考えてまいりますと、人生の中心はこれを現れた焦点より申せば、ある意味では「仕事の処理いかにあり」といつても必ずしも過言ではありません。

■「幸福論」ヒルティ著

仕事の処理については深く書いてある書物は
ヒルティ 幸福論 卷一 岩波文庫

の初めであります。このヒルティという人はスイス近代の鉄人です。この書物は全世界に広がってずいぶん多くの人に読まれているようです。わが国ではかつてケール先生がこの書物を推奨されています。この本の最初の一章だけ読んだだけでも、仕事の処理の上で相当の力が出ましよう。（大羽光生記）

（修身教授録第三卷昭和18年9月刊 同志同行社刊）

われら今日何を為すべきか

（微言）
森信三

○「われら今日何を為すべきか」という問いに対して、言下に明答しうる人が幾人あるといえるであろうか。

○この最大問題に答えるには、大体二つの立場があると思う。一つは民族主体の立場であり、今一つは個人主体の立場である。

○そのうち民族主体の立場とは、いうまでもなくわれら日本民族は今日何を為すべきかということであり、個人主体の立場とは、一個人として今日われ何を為すべきかということである。

○民族主体の立場に立つ場合にもさらに二つの面があると思う。その一つは第二次世界大戦に対するわれらの民族的過誤の悔悛（かいしゅん）であり、今一つはその立場に立って、現在刻々に進行しつつある国際情勢の推移を静観することである。

○前者は自らの過去の誤ちを雪（すす）ぎ清

めることであり、後者はかくして洗い浄められたる眼を以て、刻々に進行しつつある現実の世界史を大観することである。「翫（ひるが）えされたる眼」を以てせずして、真に世界史を正観することは出来ない。

○われらは第二次世界大戦における過誤の深省に徹することによって、われらの敗戦を神の審判として観ずると共に、さらに神の審判には終期なくして現在の世界の動きそのものもまた神の大いなる審判への歩みだということが徹省せられる。

○今こそわれらの民族は民族として初めて真の神を知り初めたのである。自らの過誤の徹底深省なくしては神意に触れえないと共に、ひとたび神意に触れたものは、全世界において神以外の如何なるものをも畏（おそ）れなくなる。

○「猛火の只中にありてたじろがず」という不動明王の象徴する至深の真髓を、今やわれらは民族主体の立場において把握すべき時である。

○現実の深い真理は、自ら進んでこれを把握するということは少く、多くは絶対絶命の処に追い込まれることによつて、初めて把握できるのが常である。

○これは個人の場合に於ては、つとにその妥当性が承認せられてきたが、民族主体の立場においても、真理の把握はついにこの型を出で得ないことを、今やわれらの民族は、身を

以て知らしめられつつあるのである。

○まことに至探の真理は、自ら進んでこれを把握するという程度の甘いものではなく、絶対絶命、宇宙の間逃るる処なきまでに追いつめられた極限に於いて、初めて把握できるものである。

○われらの民族が身に寸鉄を帯びずして、世界史上未曾有の動乱の前夜におかれていたということは、正しく神がわれらの民族に、自らを示現（じげん）し給はんがための深意と見る外ない。

○世界史上未曾有の敗戦を満喫した上、さらに全世界の分裂的対立という激動の只中に、一葉の片舟の如くに漂はされているわれらの民族に対して、爾来（じらい）初めてわれを知るべしと宜（のたま）う神の無言の宣示（せんじ）でなくして何であろう。

○神を知るものの弱さと、神を知るものの強さと……この両面の一体的把握を、今こそわれら骨髄に徹して体認すべき時である。

○神を知る弱さとは神に対する面においてあり、神を知るの強さとは、神以外のものに向う時である。

○嗚呼、八千万の同胞よ、果して神を知るものの弱さと強さとを体認しつつありや。これ今日われらの民族に対して神より要請せられつつある第一義諦たることを知らねばならぬ。

（開頭）昭和25年4月号（通巻37号）

あとがきに替えて

ヒルティの「幸福論」は、若い頃渡部昇一氏の本で知った。やはり良い本は読まれているということだ。今号の「微言」はまさに現代にも通じる内容と思う。ただし森信三先生が意図されたようには現代人には受け取られていない側面があるように思う。つまり日本をとりまく現状を視れば、ノホホンと国防を米国頼みにすることや、防衛費を増やさないという選択肢はない。これも神がわれら民族に示されているという受け取りである。中国の戦闘機を含む40機が宮古島北方を往復し西太平洋で軍事訓練を実施した。尖閣周辺は中国の公船が我が物顔で領海侵犯を繰り返す。北朝鮮は北日本の日本海にミサイルを複数回ぶち込んだ。（30日二纂）

〒633-0003
桜井市朝倉台東2-538-89
電話0744-4513422
Email:hij3@ken.jp
http://web1.ken.jp/syushn